

## ■ドイツ薬局研修参加学生を引率して

2月18日（火）～2月29日（土）にドイツ・ロッテンブルク（アムネッカー）の薬局で5年次生の学生が研修をおこないました。実施した研修内容と研修に参加した学生の体験記をお届けします。

本研修は、ドイツで薬剤師としてご活躍中のアッセンハイマー慶子先生が開設されているセントラル薬局（Central Apotheke）にて実施されました。本研修の目的は、“医薬分業”発祥の国ドイツで、日本とは全く異なる医療制度を学び、健康サポート薬局・かかりつけ薬剤師とは実際にどのようなものなのかを体験することにより、自分の理想とする薬剤師像を思い描く一つのきっかけにしてもらうことです。

第2回目の研修となる今回は、9名の5年次生が参加してくれました。研修の主なスケジュールは次の通りです。9名は3名ずつの3グループに分かれ、アッセンハイマー慶子先生、ドイツ人薬剤師、ドイツ人PTA（Pharmazeutisch-Technische Assistenten；薬学技術アシスタントの略 PTAは薬剤師と共に処方箋業務にあたる）の指導の下、①薬局業務一般（処方薬の箱出し調剤とピッキングマシンによる薬剤師業務の効率化、医薬品の購入・供給などを体験）、②OTC医薬品や処方解析等の調査（薬局内で疑問点を自ら見つけ、グループ内で考えをまとめ、アッセンハイマー慶子先生とディスカッション）、③ラボでの調合（ハーブティーやハンドクリームなどをレシピに基づいて調製）、といったドイツの薬局での業務をローテーションで行いました。

学生たちは、日々の業務の中で感じた薬局業務や調剤業務の疑問点について、アッセンハイマー慶子先

生と熱心にディスカッションをしていました。また、市販されている二日酔いの薬の成分を調べ、それらの成分を購入し、実際に自分たちで二日酔いの飲み薬を調製しました。その際、ドイツの薬剤師は購入した各成分を使用する前に純度確認することが義務付けられていることに学生たちは驚いていました。これら薬局業務以外にも、テュービンゲン大学薬学部やテュービンゲン大学附属病院薬局の見学、Dr. Russ先生（産婦人科医）やDr. Baur先生（総合医）とのディスカッションを通して、日本とドイツの医療体制や制度の違いを学び、先生方に熱心に質問していました。いずれの先生からも、「日本の薬学生は勉強熱心で優秀だ。ドイツの薬剤師・薬学生も見習わなければならない。」といった感想をいただきました。約10日間の短い研修期間でしたが、学生の満足度は非常に高く、日本での実務実習で得られた体験とはまた違った忘れられない貴重な体験になったと思います。本研修に参加した学生が将来、日本にとどまらず世界を相手にグローバルに活躍できる人材になることを期待しています。

最後になりましたが、本研修にあたり、我々に対しドイツ滞在中の日常生活のサポートからドイツの薬局業務・薬剤師としての在り方について懇切丁寧、熱心にご指導下さったアッセンハイマー慶子先生始め、セントラル薬局スタッフの皆様はこの誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

薬品分析学分野 教授 武上 茂彦



研修終了時の集合写真



患者対応の様子

## ■薬品物理化学分野 5年次生 服部 恵美

ドイツではどのように薬局薬剤師が地域医療に貢献しているか、現地で学んだ日本との違いについて紹介します。①ドイツの薬局は非営利である。チェーン店経営が許可されておらず、近隣の薬局が連携し夜間営業を分担するなど患者第一の経営が行われています。②かかりつけ薬局の普及。3つ以上の医療機関にかかる患者の88%がかかりつけ薬局を利用しています。③ドラッグストアと調剤薬局の中間の規模と品揃え。医薬品だけでなく化粧品やホームケア用品まで扱い、地域住民の生活を支えています。④業務の効率化。PTA（薬学技術アシスタント）やピッキングマシンの活用、箱出し調剤により、患者にとっては待ち時間が無く、薬剤師にとっては服薬指導に注力できる医薬品の受け渡しを実現しています。

このように利益の追求や雑務に追われることなく、薬学・医学・科学の知識を持って薬剤師の職能を十分に発揮し、地域住民の健康を支える薬剤師の姿を見ることができました。それでは日本はどうか、という問いが生まれますが、日本には患者に合わせた一包化や剤形変更、症状に合わせた計数調剤、薬歴の管理など、ドイツでは行われていない患者様個人に合わせたオーダーメイドの医療を提供していることが分かり、ドイツの薬剤師の方々にも感心していただける場面がありました。一方で、時間のかかる調剤や、地域を見ることなく本社の指示で売られる健康食品、薬剤師の仕事への理解の不足など、薬剤師が地域住民に頼

## ■代謝分析学分野 5年次生 満田 春香

薬局での研修の他にも、開業医との懇談や、病院薬局・大学内の見学など、たくさんの貴重な経験することができました。

医師との懇談では、ドイツ医療のメリットとデメリットや薬剤師に対するイメージ等伺いました。休診時には薬局で患者の対応をするなど、医師と薬局の間で強い信頼関係が築かれており、良い連携がとられているように感じました。アッセンハイマー慶子先生に通訳していただきながら、時間の許す限り議論を重ね、ドイツの医療についてより深く理解することができたと思います。インターネット上で知ることができるとありますが、実際に足を運び、自分の目で見て聞くことの大切さを実感しました。

研修期間中には休日もあり、シュトゥットガルトに移動して自由に過ごすことができました。地元のサッ



病院薬局内の見学

※学年は参加当時のもので掲載しています。

られるための弊害が多いことも分かりました。

研修を通して、日本とドイツではどちらの薬局が優れているか、一概に答えることはできずどちらも一長一短であるというのが私の個人的意見ですが、日本とは異なる体制で活躍される薬剤師の姿を見ることで、研修初日にアッセンハイマー慶子先生がおっしゃった「薬剤師は街の科学者である」という言葉の意味について理解を深めると同時に、将来薬剤師免許を持つ者として「正しい薬学知識とエビデンスを持って人々を健康に導きたい」と強く思う機会となりました。そのために、医療制度の改正や今後薬局のあるべき姿について考え仲間と議論する、そんな研修となりました。



ディスカッションの様子



広い薬局内にて

カーチームの試合を観戦したり、ベンツミュージアムに行ったり、大きなジョッキに入ったビールを飲んだり、非常に充実した休日を過ごしました。ヨーロッパでのサッカー観戦は私の夢だったため、スタジアムに入ったときはかなりテンションが上がりました。スタジアムの盛り上がりは予想以上で、サッカーにあまり興味がない友人も一緒に楽しめたのも良かったです。

また、研修中は運良くカーニバルの期間であったため、仮装した人が薬局内に入ってきてみんなで歌ったり、研修の合間にパレードを見に行ったりできました。現地の方と触れ合える良い機会となり、とても素敵な思い出になりました。



パレードの様子